

南アフリカの歴史記述における 女性とジェンダー

Mónica Cejas

はじめに

ポスト・アパルトヘイト時代を迎えた今日の南アフリカ（以下、南ア）において、ジェンダーの視点から歴史を考えることは一般的になっている。しかしこのことは近年まで自明のことではなかった。南アの歴史記述において、女性史、あるいはジェンダーの視点に基づく分析はどのようにして出現したのか。その背景は1970年代末以降、特に80年代に顕在化した社会史への指向に求められよう。この社会史を求める動きは、70年代に台頭したネオ・マルクス主義の歴史観——それ自体は当時支配的であった自由主義的でナショナリスト的な南ア史に対抗して出てきたのだが——への応答であった。経済還元主義の傾向が強いネオ・マルクス主義に対して、社会史を指向する歴史家たちは、アフリカ人の行為主体性を強調した。そしてこの文脈のなかで、南アにおける女性とジェンダーをめぐる歴史記述が問題として浮上したのである。

1 アフリカーナー・ナショナリズムと自由主義的歴史のなかでの女性の存在

ネオ・マルクス主義が台頭する以前、アフリカーナー・ナショナリズムの視点に立つ歴史記述は、その語りから女性をほぼ全面的に排除してきた。実際、そこに描かれる登場人物は男性であって、女性に言及がなされる場合でも、それは家庭という枠組においてであり、男性への「忠実で献身的な役割」を担う存在であった。一方、自由主義的歴史記述では、女性はその法的な地位、都市生活、あるいは婚姻生活との関連で語られた。しかしその場合でも、ジェンダー分析、すなわち男女間の権力関係の社会構築的側面への視点は欠落していた。

反アパルトヘイト闘争における女性にかんする記述も例外ではなかった。この分野では、たしかに1950年代から研究が徐々に発表されてきた。だが、これらは直接闘争を経験した者の個人的な語りや非学術的な報告であったり、アフリカ人女性

の法的状況を記述したものであった。反アパルトヘイト闘争の歴史分析は、70年代末までその対象のなかに女性を含めてこなかったのである。研究は散発的にはあったが、いかなる意味でも「主流」のなかには含まれていなかった。また、こうした孤立した研究は、その目標を「隠された女性運動史」(hidden history of female activism)を掘り起こし、既存の歴史記述を修正することに置いた。このこともあって、これらの研究では、パスの強制に対する女性たちの抵抗と抗議が重要なテーマとなり、女性の役割を「受け身的で不可視」にしてきた南ア史に対する問題提起がなされた。76年のソウェト蜂起以降における女性運動の活性化、そして女性にかんする研究の国際的な発展は、ウィットウォーターズランド大学、ケープタウン大学を主要な拠点して展開されるこれらの研究の新しい動向を力づけた。

この時代、反アパルトヘイトの抵抗運動について研究することは反体制的と考えられていた。このため、秘密裏にインタビューを実施したり、研究を継続するためには、権力の裏をかいたり、政治的交渉を行わなければならなかった。大多数の場合、学術研究と政治活動は同じコインの表と裏という関係にあったのである。

2 マルクス主義の視座

解放闘争における女性の役割を取り扱った1970年代の研究は、唯物論的分析の適用という特徴をもっていた。女性の歴史は階級分析に依拠し、階級とイデオロギーの関係を問わなければならぬとされた。ボソーリ (B. Bozzoli) によれば、当時きわめて大きな影響を与えた論文に、ウォルプ (H. Wolpe) の「南アにおける資本主義と安い労働力」(72年刊行)がある。同論文は、原住民指定地

経済の起源とその機能にかんする構造的解釈を示すものであり、資本主義的生産様式の要請のもと、アフリカ人男性は半プロレタリア労働者として組み込まれる一方、女性はサブシステム経済と、原住民指定地における社会的、ならびに生物学的な再生産を担わされた、という議論が立てられた。また、これに伴って、女性労働力にかんする一連の研究が見られるようになった。

3 ジェンダー分析の導入

1970年代末になると、女性史にかかわるようになった一部の研究者が、ジェンダー分析、ならびにフェミニズム理論による社会分析のカテゴリーを導入するようになった。このうち、ウォーカー (C. Walker) は早くも78年に発表した修士論文の序文において、孤絶したカテゴリーとして「女性史」を捉える見方の限界に触れ、これを社会全体の分析のなかに取り込むことの必要性を訴えていた。これらの研究者は、純粋に唯物論的分析を指向する研究者からは「フェミニスト」と呼ばれていた。しだいに彼女たちは、女性の抑圧を説明するにあたって、ジェンダー、階級、そして人種に関する分析を組み合わせる方向を目指すようになり、また女性の「行為主体性」を奪回する必要性を強調するようになった。そして女性の行為主体性を否定する「純粋マルクス主義者」を批判するようになった。

1983年、ボソーリは「マルクス主義、フェミニズム、そして南ア研究」を発表し、そのなかで、南ア史のなかでジェンダー分析を取り入れることを提案した。ボソーリは、女性が被る抑圧の多くの局面は、資本主義分析でだけでも、家父長制システムの視点からだけでも説明できないと述べ、新たに「パッチワーク・キルト」としての家父長

制概念を用いることを主張した。それによると、19世紀において、「女性の抑圧」という名のもとに捉えられた状況は、併存する複数の家父長制システムが、それぞれ固有のやり方で男女の関係を制度化したことによってもたらされた。こうした状況には植民地支配と宣教師団の活動の影響があった。その結果、前資本主義的家父長制の諸形態と、鉱業資本の導入と近代国家の形成によってもたらされた近代的な家父長制への従属というパッチワークが生み出されることになった。またボソーリは、マルクス主義者は家族を社会の再生産単位と見なす傾向にあるが、この家族の内部においてジェンダーの闘争があるという点については見逃しているという指摘も行った。

こうして、これらの研究者は唯物論的分析を完全に放棄することなく、研究の焦点をしだいに女性の政治活動に合わせていった。また、家事労働研究にジェンダー分析を適用するようにもなった。ボソーリの影響もあってか、家族構造と家族の内部におけるジェンダー関係に関する研究を指向する者もでてきた。たとえば、1987年には、ガイ(J. Guy)が家族分析を基礎としつつ前資本主義社会におけるジェンダー関係の検討を行なうという、先駆的な論文を発表した。そして、88年にはランフェーレ(M. Ramphele)とブーンザイアー(E. Boonzaier)が「ウェスタン・ケープにおけるアフリカ人移民労働者向け男女別宿泊営業」と題する社会学的研究においてジェンダー分析を導入した。しかしながら、これらの研究の大多数はアフリカ人女性を対象とし、白人女性の状況に直接的に言及するものは依然として少数であった。

4 1980年代の特徴

1984年にウィットウォーターズランド大学で

歴史学ワークショップ「階級、コミュニティ、紛争——ローカルな視点から」が開かれ、55本の報告がなされたが、そのうちの4本が女性の地位、世帯、家族、家父長制について言及したものであった。とくに、ブラッドフォード(H. Bradford)は、29年のビールを密造する女性たちによる抵抗運動を論じた報告を行ない、次の点を認める必要があると訴えた。

「……資本主義と国家が、男性と女性とは異なった経験としてあったこと、政治的・社会的組織においてはジェンダー特定の関係があったこと、賃労働と小売業のあいだには性別による非対称な関係があったこと。そしてなによりも認識しなければならないのは、女性が一つの性として、男性とたんに区別されていたというだけでなく、男性に従属していたという点である」。

このワークショップの目的は、歴史・社会研究に必要な共通の枠組みを作ることにあった。このことを考えると、ジェンダーの視点がそのなかに含まれたということは意義深かった。ワークショップにおいては「男性偉人が歴史教科書に君臨する」傾向や「労働者、女性、そして貧困層の視点がほとんど聞こえてこない」という傾向への批判が加えられた。

他方、1987年になると雑誌『アジェンダ』(Agenda)が創刊された。その創刊号では次のような言明がなされている。

「南アにおいては、全国民的闘争、労働者による闘争が緊急を要することから女性の立場と経験の固有性が無視され、極端な場合には南アにおいてフェミニズムが果たすべき役割はないといった議論さえまかり通ってきた。『アジェンダ』本誌は、ジェンダー関係がまさにアジェンダとして確固とした位置を占めるべきだと信じる」。

この雑誌の編集部は「人種差別と資本主義の歴史という文脈のもとでの不均等なジェンダー関係に挑戦するという政治的企てを支持」し、とくに学界と女性運動を結びつけるような空間を提供してきた。この雑誌が自らを「フェミニスト」雑誌として公に認めたのは1993年になってからにすぎないが、今日では南ア最大のフェミニスト雑誌として知られている。

5 1990年代の転換点

—「南アにおける女性とジェンダー」
会議とポスト・アパルトヘイト—

1990年代初めのできごととして注目されるのは、91年にナタール大学で開催された「南アにおける女性とジェンダー」と題する会議である。この会議では女性の従属にかんするマルクス主義的解釈が、有力な歴史家たちによって厳しく非難された。とくに批判の対象となったのは、(1) アパルトヘイトと資本主義にかんするマルクス・レーニン主義的分析がそれだけでジェンダーによる従属と搾取の原因を説明できるという主張、そして(2) 女性を基本的に家族内役割、すなわち母親、妻、娘、姉妹として社会的に規定する見方である。また、90年にアムステルダムで開かれた「南アにおけるジェンダー闘争」と題されたアフリカ民族会議(ANC)の会議資料と、89年の内部セミナー資料を含んだいわゆる「マリボングウェ・ペーパーズ」(Malibongwe Papers)にも批判が加えられた。これは知識人間の論争に留まることなく、政治的な行為でもあった。なぜなら、攻撃の対象となっていたのは、アパルトヘイト反対運動の指導部、そしてアパルトヘイト以後の南ア建設において重要な役割を負う人々の見解であり、運動方針のゆくえを決定づけるような「公式見解」だったからである。

1990年、ウォーカーは南アにおける女性学の初

の論集である『南部アフリカにおける女性とジェンダー』を編集し公刊した。しかし、90年代に入ると状況は変化した。反アパルトヘイト闘争が目標を達成し、アパルトヘイト以後の社会建設が新たな課題となった。民族解放への社会科学の政治的・社会的関与はもはや切迫したものではなくなった。このことは、政治化の度合いの強い南ア社会においてはきわめて重要な点である。民族解放と南ア資本主義に焦点を当てる社会史分析は、反アパルトヘイトの大義のもとに団結してきた学界において、もはや最優先課題ではなくなった。主要な研究主題はポスト・アパルトヘイト社会建設課題を軸に組み立てられていくようになる。このようにして、ジェンダーもシティズンシップ、人権、暴力などのかかわりで検討されていくようになった。

1990年代に入ると、80年代を特徴づけた「フェミニスト」に対する攻撃は弱まっていく。その背景には女性運動にとっての国際的環境の変化がある。90年のマンデラ解放、91年の民主南ア会議(CODESA)における民主化をめぐる交渉の開始、94年の選挙実施とアパルトヘイト体制崩壊という一連の政治変動は、国際社会における女性の地位向上にかんする大規模な変化と並行して進んだ。周知のように、国際社会においては、第1回世界女性会議(メキシコシティ、75年)、「国連女性の10年(76~85年)」、そして第4回世界女性会議(北京、95年)にいたる20年のあいだに、国連システムを中心として女性運動の国際的な運動な連携が進み、とくに80年の第2回世界女性会議(コペンハーゲン)以降は、各国で女性政策の「国内本部機構」(national machinery)の設置が推進され、男女平等が国際規範として実質的に定着を深めていく。また、95年の北京行動綱領では、「ジェンダーの主流化」(gender mainstreaming)が国際的課題とし

て承認された。こうした女性運動をめぐる国際的環境の変化は、南アにおける政治的主体としての女性にかんする肯定的な評価を促進し、このことが研究者のあいだにも顕著な視点の転換をもたらした。

1960年代、70年代におけるフェミニズム運動は、ヨーロッパ志向が強く、個人主義的な南アブルジョワジーの利害と一致するものというイメージで捉えられる傾向にあり、民族解放運動全体を分裂させる危険をはらんだものと考えられてきた。このため、ジェンダー分析から引き出された諸カテゴリーを適用しようとする研究の評価にも、このような見方が影を落としてきたのである。長らく「フェミニスト」とは蔑称であって、「女性の運動」、あるいは「女性の権利」といったカテゴリーや概念を用いるあらゆるアプローチに負の価値を与えてきた。しかし、上に述べてきた女性運動の国際的な展開とジェンダーの平等という国際規範の浸透は、南アの歴史記述のあり方にも大きな影響を及ぼし、政治的主体としての女性にかんする肯定的な評価がなされつつある。

今日の南アの学界においては、多くの女性研究者がフェミニズム言説を公に支持するようになっており、議論の争点はむしろ、すでに広く受容されているジェンダー言説のなかから、どのカテゴリーをどのように適用するかというところに移ってきている。

6 結 論

以上、本稿では1970年代以降の南アの歴史記述において、女性とジェンダーの位置づけがどのように変化してきたかについて整理してきた。「隠

された歴史」としての女性史に光を当てるという先駆的な研究がなされた70年代、ジェンダー分析の導入が果敢に試みられた80年代、そして民主化という歴史的な政治変動、ならびに女性運動の国際的な環境の変化のなかでジェンダー分析の成熟が見られる90年代——このような歴史記述のあり方の変化は、南ア社会の政治と歴史的文脈の変化と不可分の関係にある。この歴史記述の変化は、たとえば反アパルトヘイト運動における女性の活動をいかに解釈するかという点をめぐる見解の相違を説明する背景となっている。今日、ジェンダーは南アにおける大多数の人びとの日常言語となっており、フェミニズムについてもアパルトヘイト時代に見られたような公然とした否定はない。翻って見るならば、社会史の流れのなかから誕生した南アの女性史は、ジェンダー分析のカテゴリーとフェミニスト批評のカテゴリーを漸進的に取り込み、女性をその社会的文脈から切り離して論じること——とくにその特定の文脈のもとで展開される男性との関係から切り離して分析すること——への拒絶を明確にしてきた。そうすることで、自らを培養してきた社会史を批判的に捉え直すとともに、その他の歴史学のあり方に対する批判も活発に展開し、歴史学と歴史記述そのものへの貢献を果たしてきたといえよう。

(モニカ・セハス／津田塾大学大学院国際関係学研究所)